

第三十二章 動物型兵器

新疆ウイルス自治領にグレーデッドの構成員が潜んでいたことにやっと中華民国の最高指導者が気付く。グレーデッドは中華民国政府に半ば奴隷同然に扱かれていたウイルス族を隠れ蓑にして潜伏していたのではなかった。新疆ウイルス自治領内には数多くの湖がある。中には深さが千メートルを超える深い湖があった。

かなり前にメキシコ湾の底が抜けて大量の海水が底の穴から地下に流れ込んだ。海面が下降して、たとえば中国大陸と鯛湾島が地続きになった。そのとき新疆ウイルス自治領の中でも奥地にある砂漠に海水が湧き出して巨大な湖が出現した。

やがてメキシコ湾の底の穴が塞がれるとこの巨大な湖も縮小したがグレーデッドはしぶとく湖底に基地を建設した。ノロから強烈な影響を受けた彼らは様々なアイディアを開発するが、残念な事に製造設備を持っていなかった。

一方、中国大陸と鯛湾島が地続きになったとき、元々中国大陸沿岸を活動の本拠地にしてたグレーデッドはノロとの戦いに敗れて鯛湾に逃亡した構成員がいた。元来鯛湾人は温厚だったからグレーデッドの残党は根を下ろすことができた。

設計をウイルス自治領に潜むグレーデッドが、製造を鯛湾のグレーデッドが担当した。鯛湾

での製造はまず鯛湾民族を教育することから始めた。鯛湾民族は優秀で緻密だ。その長所を高めることから始めて短期間で鯛湾を世界の精密工業国へと育て上げた。一方政界にも進出し国防産業を育成した。

発足当時は中華清国を列強各国の侵略から守るために結集した組織だったが、皮肉なことに、今は中華民国の侵略から鯛湾を守るために秘密裏にあつと驚くような兵器を開発製造した。このようにグレーデッドは列強国や大国から、植民地化されそうな国や小国を守る事を信念とする組織だった。

だから大国ソシアに侵略されたウクライナーにも肩入れする。それは来たるべき鯛湾の危機に備えるためでもあつた。ウクライナー防衛を実験台にしている側面があるにせよ現実を見極めて着実に地力をつける。

宇宙戦艦のような馬鹿でかい兵器ではなく相手に威圧感を与えないように動物に近い形の強力な兵器を完成させた。

*

鯛湾総統からの説明が終わる。

「と言うことは総統自身グレーデッドの構成員……いえ、グレーデッドの大総統？」

鯛湾総統が珍しく笑う。

「イリ女王は今でもグレーデッドの大総統でしょ？」

「うーん。どうか。宇宙に打って出た方のグレーデッドの大總統かもしれないけれど……イリ王国の女王の立場と同じで、肩書きなんてどうでもいい」

打ち解けた会話に変わる。

「私も飾りのようなもの」

「でも總統を地球グレーデッドの鯛湾支部長にしてくのはもったいない。バトンタッチするから、地球グレーデッドの大總統になってください」

「滅相もない。私にはイリのような器量はないわ」

「まあ、いいじゃないの。それより動物型兵器か。ノロもカブトムシ戦車やクワガタ戦闘機なんか作ってよく遊んでたわ」

「それ、それ！」

にわかに總統が興奮する。

「お願いしたいことがあるの」

總統がイリの手を引いて部屋を出ると駅を指す。

*

特急ウク・ライナーのほぼ真ん中付近に無蓋車が二両増結されている。それぞれに黒光りする塊が乗せられている。

「これは！」

近づくまでもない。カブトムシ戦車とクワガタ戦闘機だ。イエロー・タイガーなどと違ってこの戦車と戦闘機はノロのオリジナルなのでイリが驚くのも無理はない。

「どこで手に入れたの？」

「特急ウク・ライナーのチーフ車掌。ご存じないですか」

イリが首を横に振る。顔中ヒゲだらけとか髪の毛だらけという噂は聞いていたが車内で出会ったことはなかった。想像するまでもなく不潔そうなので会いたいと思わなかった。

「会ったことはないわ。全身毛むくじやらだと言う話は聞いたことがあります。モフモフだったら興味あるけれど、硬い毛に覆われているとか……確か爺や、いえ長老が言ってたよう……。」

総統はそれ以上のことを聞くつもりはないので入手経路の説明を省略してしまう。

「お願いというのはこの戦車と戦闘機をウクライナー共和国に届けて欲しいのです」

「届けるもクソもないわ」

長老が割り込む。

「イリ様。お言葉が下品ですじゃ。つつしまなされ」

しかし、イリは無視する。

「連結されているのは特急ウク・ライナーよ。目的地は当然ウクライナー共和国の首都キープ。ひよっとしたらノンストップかもしれないわ。私は単なる乗客。でも何かワクワクする。カブ

トムシ戦車はコバルト・カウやイエロー・タイガーより遙かに強力な戦車。空だつて飛べるのよ。それにクワガタ戦闘機は地上でも戦える万能戦闘機」

「戦車が空中戦？ 戦闘機が地上で？ どうやって戦うの！」

「それは見てのお楽しみ」

第三十二章 動物型兵器